**三國　玲子 （みくに・れいこ）**

**１、プロフィール**

アララギ的写実の技法に立つ歌人。鹿児島寿蔵に師事し、初めナイーブな青春歌とみずみずしい相聞歌を歌った。ついで歌境を深め、歴史的視野を持つ独自な社会詠を作った。

＜生没＞

1896（明治29）年４月27日 ～ 1976（昭和51）年５月16日

＜代表作＞

歌集『空を指す枝』『鏡壁』

評論「わが体験的40年代記」

＜青森との関わり＞

1945年から1947年まで弘前に疎開。アララギ歌会に出席し､「アララギ」「潮汐」に入会､津軽で作歌に志した。

**２、作家解説**

三國玲子は、父三國慶一（弘前市出身彫刻家）と母アサ（旧姓南雲、栃木県出身、画家を志す）の長女として東京に生まれた。疎開地弘前で「アララギ」「潮汐」「新泉」に入会、鹿児島寿蔵に師事し短歌に進む決意をした。のちに疎開生活が父祖の意識を、戦争体験が社会詠をもたらし、独特な三國短歌が誕生した。

60年安保闘争・ベトナム戦争に関する行動、古代朝鮮と祖の意識を通じ、いかに生き何を歌うべきかを考えた。全身全霊を込めた短歌は気品と孤愁に満ち、生前の六歌集は全ての歌風が変貌した。「潮汐」の後継誌「求青」編集人。朝日歌壇時評初の女性執筆者。現代歌人協会会員。日本文芸家協会会員。入院先で自裁した。享年63歳。

第１歌集『空を指す枝』(1954年）は、浪漫的青春歌が若者の共感を得た。第２回新歌人会賞受賞。疎開地弘前の作品も秀作で、女性の歌集刊行の先駆けとなった。

つば広き帽子を男に拾はしめ何時もクインになりたいのでせう　『空を指す枝』

第２歌集『花前線』（1965年）は『空を指す枝』に無いと評された社会性に目を向けた。第３歌集『噴水時計』(1970年）は叙情と社会性の融合が高く評価された。

ただ一人の束縛を待つと書きしより雲の分布は日々に美し　　　　『花前線』

戦後とはわれに何なりし藤波の髪飾ゆるる今日の車内に　　　　　『噴水時計』

第４歌集『蓮歩』（1978年）と第５歌集『晨の雪』（1983年）は、「父の国と古代朝鮮へのまなざし」が社会詠を耕し、感性ある大作と「祖の意識」が極まった。

いにしへも今も等しき哀しみに朝鮮を想ふ貝塚の上　　　　　　　『蓮歩』

国防を言ふならば言へ先づ起ちてその子を狩れよみづからの子を　『晨の雪』

第６歌集『鏡壁』(1986年)は第11回現代短歌女流賞に輝く。写実に立つ社会詠は抒情と思想が融和し､祖の意識と戦争体験が三國を昭和の時代の語り部たらしめた。

旭日のすぢ褪せて立つかの旗を忘れむとしき忘れ得ざりき　　　　『鏡壁』

**３、資料紹介**

〇第６歌集『鏡壁』

図書

1986（昭和61）年11月29日

193mm×130mm

三國の歌風は常に変貌を遂げた。処女歌集『空を指す枝』の甘美な青春歌から、第６歌集『鏡壁』の鋭く時代を見すえた社会詠に到達した。第11回現代短歌女流賞を得た『鏡壁』は、戦後をいかに生きるかという自己命題に対する最後のメッセージとなった。